香取遺産

Vol.102

問生涯学習課 ☎(50)1224

山之辺のささら舞を伝える弥勒碑

ふりょうがまいる どれからまいる

▲ささら舞の道行き

▲ささら舞の起源が記された弥勒碑

市の西部、玉造の住宅地を臨む台地の奥に、ひっそりとたたずむ石碑があります。この石碑は昭和12年の4月に地区の人たちによって建立されたもので、正面には「筰簷舞先祖越後国弥勒碑」と刻まれており、背面には昭和53年まで、この地に伝承されていた「ささら舞」についての起源が記されています。その内容は「神話の昔、香取の祭神である経津主命が豊葦原中津国を平定する際、陣中で踊らせたものが伝わったという。詳細を記した文書は嘉永年中に火災にあい焼失してしまった。言い伝えでは土御門天皇の時代（鎌倉時代）に香取神宮の神幸祭に供奉していたが、やがて時代とともに衰退し、徳川の時代になって、越後の国の弥彦神社の神主弥勒という人が来て調子を整えた。その弥勒塚と伝えるこの跡に一碑を建ててお祀りする」というものです。

今は伝承が途絶えてしまっている、「ささら舞」とはどのような芸能だったのでしょうか。

「ささら舞」はその名のとおり、「ささら」という2本の竹を摺りあわせる楽器を用いる舞（踊）のことです。ささらを持つのは14人の児童で、これに露払いの天狗、大太鼓、小太鼓、笛がつきます。ささらの踊りは、天狗を中心にささら役が輪になって囲み、手に持ったささらを大きく摺りながら踊歌に合わせて輪をすぼめて行くというものです。「山之辺のささら舞」は、ささらを使って囃したてる行為がすなわち踊りになっているもので、その出で立ちや踊りの形からも中世以来の風流踊を伝えていました。

「ふりょう（＝風流）がまいるどれからまいるこうや駿河の国からまいる」という歌い出しは、この芸能の出自をなにより物語っているといえるでしょう。